

11月19日に香川県文化振興課から、以下の報道機関各社様に同内容を情報提供しております。  
高知新聞社、四国新聞社、西日本放送（RNC）、徳島新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社、岡山放送（OHK）、  
FM香川、時事通信社、山陽新聞社、NHK、テレビせとうち（TSC）、産経新聞社、読売新聞社、瀬戸内海放送（KSB）、  
日刊工業新聞社、共同通信社、朝日新聞社、RSK山陽放送（RSK）、愛媛新聞社

# Press Release



令和7年12月9日

## 香川県・東京藝術大学・香川大学 瀬戸内海分校プロジェクト 「じぶんうみ」展を開催します！

「瀬戸内海分校プロジェクト」は、国内外で活躍中のアーティストとともに、フィールドワークや作品制作、展覧会の準備・開催に至るまでの一連の流れを実践的に学ぶプロジェクトです。このたび、今年度の活動の集大成となる展覧会「じぶんうみ」展を開催します。3人のアーティストと中高生らが創りあげた個性豊かな作品をお楽しみください。

また、初日の12月17日（水）には東京藝術大学美術学部長やアーティスト3名らが参加するオープニングセレモニーが開催されます。

是非とも取材いただきますよう、お願い申し上げます。

### ○「じぶんうみ」展 開催概要（詳細は添付リーフレットをご覧ください。）

主 催：香川県、東京藝術大学、香川大学

共 催：高松市美術館

会 期：令和7年12月17日（水）～令和8年1月12日（月・祝） 9時30分～17時

月曜（祝休日の場合は翌平日）および年末年始休（12月29日～1月3日）は休館  
※初日のみ12時から一般公開

会 場：高松市美術館 M2展示ロビー（高松市紺屋町、入場無料）

問合先：県文化振興課（087-832-3785）

### ○「じぶんうみ」展 オープニングセレモニー 開催概要

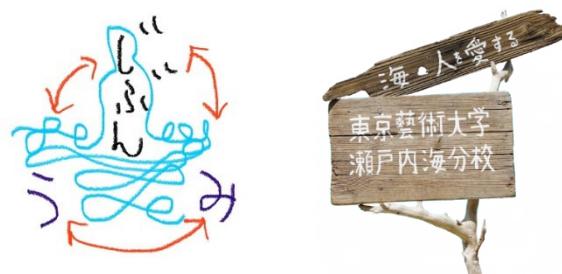
日 時：令和7年12月17日（水） 11時～

会 場：高松市美術館 1階講堂（高松市紺屋町）

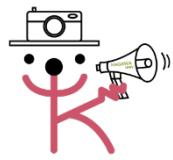
出席者：東京藝術大学美術学部長、香川大学長、アーティスト（西原尚氏、柴田早穂氏、菅野歩美氏）、

（予定）高松市美術館アートアドバイザー

その他：オープニングセレモニー終了後、報道機関向けの内覧会（講評会）を実施します（約30分間）。



「じぶんうみ」、看板ロゴ画：東京藝術大学長 日比野克彦



取材申込はこちらから↓



➤ お問い合わせ先  
<国立大学法人香川大学>  
地域創生推進部 イノベーションデザイン研究推進課 林  
TEL:087-832-1507





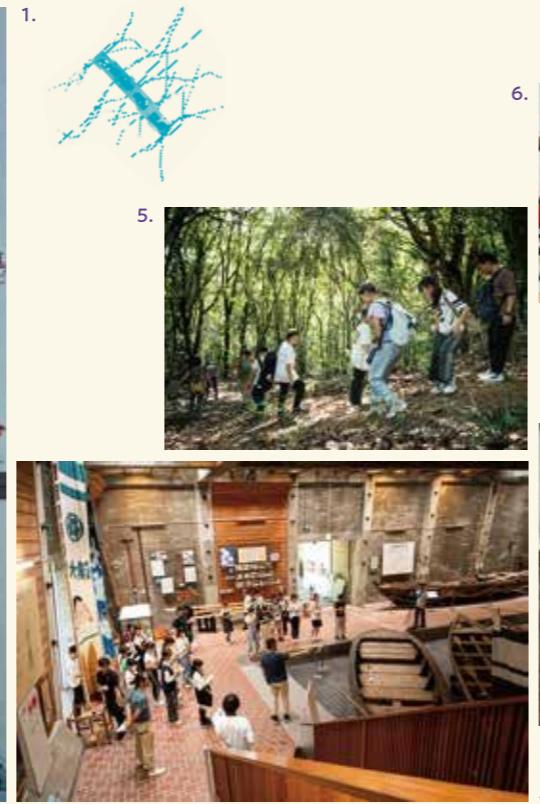
1,2. 公開ワークショップ  
「beforeのbefore—見えないものに線をひく」  
3. 香川大学の調査船による海洋調査  
4. 濑戸内海歴史民俗資料館のリサーチ  
5. 西原チーム／サスカイトのリサーチ  
「けいの里」にて  
6. お面を制作するワークショップ



2.



3.



7. 菅野チーム／ゲーム制作の様子  
8. アーティスト紹介の様子  
9. 西原チーム／サスカイトのリサーチ  
「けいの里」にて  
10. 菅野チーム／アニメーション制作  
11. 柴田チーム／鋳造ワークショップ  
12. 西原チーム／音の観察  
13. 芸術未来研究場せとうち

## アーティストが中高生・大学生らと共に 「じぶん⇄うみ」展をつくりあげます

洋環境を想う「海は人を愛する」をメインテーマに2022年度から始まった「瀬戸内海分校プロジェクト」は、国内外で活躍しているアーティストと、中学生・高校生らがチームを組み、フィールドワークや作品制作、展覧会の準備開催を行うことで、作品の企画立案から展覧会開催に至るまでの一連の流れを実践的に学ぶプログラムです。

2025年度のサブテーマは「じぶん⇄うみ」

瀬戸内海の環境や文化を「自分ごと」にして、じぶんとうみの関わりを見つめます。

瀬戸内海とそこに暮らす人々について考えを深めながら、展覧会開催までのプロセスをアーティストとともに重ねてきました。その集大成となる「じぶん⇄うみ」展を、高松市美術館で開催します。



### 舵取りアーティスト

柴田早穂



瀬戸内海に生きる私たち。  
過去から紡がれてきた記憶を受け継ぎ、  
いまを未来へと紡いでいきます。  
これは、私たちのための、  
そしてまだ見ぬ誰かのための  
「瀬戸内海のアーカイブ」づくりと、そのプロセスです。

菅野歩美



同じ海の近くで生まれ育っても、  
「じぶん」と「うみ」との距離感は生活環境や時代、  
社会によって変化します。  
活動では、参加者それぞれのリアルな海との距離感を  
共有し、過去の人々が築いてきた海との関係を学び、  
未来における海との関係を模索しました。

西原尚



海を見ていると飽きない。  
海が私の気持ちを受け止めてくれるのだろうか。  
私たちは海に支えられている。  
海の幸だけでなく、プランクトンが酸素をつくっている。  
海は汚れたものも、きれいなものも受け止めている。  
そんな海を、音からも感じている。

1986年大阪府生まれ。5歳より香川県小豆島で過ごす。富山大学芸術文化学部、東京藝術大学大学院で鋳金を学び、同大学鋳金研究室の教育研究助手を経て、小豆島に「宮の森鋳造工房」を構える。鋳造という技術を介して、土地の記憶や風土、そこに生きる人々のいとなみをうつしとり、過去から現在、そして未来へつなぐ作品を制作している。素材採取を起点に展開するフィールドワークでは、環境について学び、土地に根ざす声に耳を傾け、地域の人々と協働しながら、その過程そのものをインスタレーションとして提示する。また、小豆島にて「しょうどしま民俗座談会」を立ち上げ、聞き取り集の制作にも取り組んでいる。

1994年東京都八王子市生まれ。2025年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程（油画）修了。どこの土地にも存在する、土地にまつわる物語や伝説、幽霊譚。フォークロアと呼ばれるそれらは、なぜ人々によって紡がれてきたのか、その背後にある歴史や個人の感情を想像することで生まれる「オルタナティヴ・フォークロア」をドローイングや3DCGを使ったアニメーションによって表現している。主な個展に、「Boring process たくいつな掘削かい」現代芸術振興財団（東京、2025年）「明日のハロウィン都市/Halloween Cities of To-Morrow」SACS（東京、2023年）。

音を基軸に、サウンド・アート、パフォーマンス、楽器作り、非常勤講師など活動。音に導かれるまま、物や体や場にも関心の対象を広げる。人がどのように音をきいているのかを考えている。知らない人と会いたい、知らない文化や習慣に触れたい、そのため国内外で展示やパフォーマンスを続けているよう気がします、とのこと。昨年は、新潟、ベネチア、東京。これまで日本以外では、アルメニア、台湾、NY、ポーランド、ベルリン、ロシア、中国、フランス、釜山、イギリス、ベオグラードなどの地域や国々にて展示やパフォーマンスを行なう。1976年、広島県生まれ。東京藝術大学、東京大学、福山大学、横浜国立大学にて音に関する授業を担当。